

## 緒 言

近年、子どもをめぐる様々な話題が社会に提供されている。その一つは犯罪に巻き込まれて犠牲になる子ども達である。例えば、昭和 35 年あたりから増加し初め、昭和 38 年の吉展ちゃん事件で一気に社会問題となり、その後も事あるたびに注目されながら現在に続いている「子どもの略取/誘拐/殺人」である。つい最近も奈良県で幼い女兒が犠牲になったばかりである。これらは、通常一人の成人が犯人で犠牲者も一人であるが、近年では大阪教育大学池田附属小学校事件のように犠牲者が複数であることもあり、犯人が子どもであることも目につくようになってきた。実は、子どもに関する話題の二つ目は、このことであり、多くの一般人が子どもによる犯罪が増加、低年齢化、さらには、凶悪化しているのではないかという疑いを、マスコミの報道を通じて共有するに至ったことである。例えば、8年ほど前の神戸市須磨区での15歳中学生男子生徒の児童殺傷事件、一昨年の長崎市の14歳中学男子生徒による幼児殺人、昨年佐世保市での11歳女子児童に対する同級生の女子児童による殺人事件などが記憶に新しい。こうしたニュースに世間は驚き、マスコミもしばらくは事件として大きく扱うが、世界的に、時代的に、果たして現在の我が国が最悪な状態であるのかについては検証の必要があるであろう。そうした冷静な認識を共通に持った上で、問題解決への道を探ることが必要であると考えらる。

このことは、我が国はあらゆる方面において、戦後60年を経ようとする今日まで、追いつき、追い越せ、追い越させるな、と息せき切って走り続けてきたことを、ここで改めて振り返り、将来を託する子どもたちに対する「子育て」は、これでよかったのか？と自らに問いかける契機にもなったと言えるであろう。これに対して、いわば社会が注目する出来事に触発されて、様々な観点から、子どもの実際の姿を問い直そうとする動きが出てきている。法曹界では、犯罪の責任を問う年齢の引き下げに関する議論があるし、教育界では、学校教育における様々な問題の解決に向けた真摯な議論がなされている。医学界では、こころに病を持つ児童を診る児童精神科医があまりに少ないことに戸惑いを隠さないし、一方小児科学会では幼少時にあまりテレビを長い時間見せるべきではないとの提言を公表している。このように、各者各様ではあるが、考えをめぐらし、行動を始めているのが現状である。しかし、残念ながら、できる限り多くの俯瞰的視点から子どもの問題を取上げるとともに、長期的な視点で、この問題に解決を与えるよう集約的に議論が積み重ねられているとは言い難い。

この点を重く見た日本学術会議では、初めに例示したような子どもを取り巻く社会的な諸問題を、ただそれだけのものとして考察するのではなく、その裏に深く潜む遠因をも視野に入れて、ダイナミックかつ多角的に考察を加えることにより、何らかの具体的な対策を示すことを目的として、第一部を中心に「子どものこころ特別委員会」を設置した。この委員会の立ち上げに際して、現在の子どもを取り巻く諸問題は、「子どもの身体的、精神的な発達の過程に生じている変化、家庭や地域社会などの子ども

の育成に関わる環境の変化、情報技術をはじめとする物質的、文化的環境の変化、価値観や欲望の変化とその多様性、など多くの要素が複雑に交錯しあった結果として捉えることとした。その上で、社会の安定と子ども達の健全な成長のためには、各学問分野における最新の研究成果の俯瞰的考察に基づいて、早急に問題点を明確化するとともに、このことが21世紀の我が国が健全な発展を遂げることを祈りながら、可能な限りそれらへの対策の提言を試みた。

丁度この報告書をまとめている時に、平成17年2月23日のお誕生日での会見において、皇太子殿下からのお言葉が報道された。あらかじめ差し上げてある記者からの質問には、敬宮さまの今後の養育方針についての項目があったが、それに対する皇太子殿下のご回答が我が国の一般社会に、静かなしかし大きな感動を呼んでいる。それはアメリカの家庭教育学者であるドロシー・ロー・ノルト(Dorothy Law Nolte)氏の作とされる「子供」と題する詩が紹介されていたからである。これは、「批判ばかりされた子供は、非難することを覚える」で始まり、「可愛がられ、抱きしめられた子供は、世の中の愛情を感じることを覚える」で終わる、わずか11行の詩である(川上邦夫氏訳)。ノルト博士は、現在81歳で家庭教育の子育てコンサルタントとしてつとに有名であり、「子は親の鏡」と題して、類似の詩があることも知られている。確かに、現代の社会全体が子どもの「躾の仕方」「会話の仕方」「学ばせ方」「食べさせ方」など、あらゆる観点からの「子どもへの接し方」に戸惑いを見せている。そうしたところへ、いわば子どもとの接し方のバイブルのように考えられている書物が改めて紹介されたのであるから、まさしく「魔法の言葉」のように受け取られているのであろう。しかし一方では、この詩が苛められた子どもたちが皆まともな育ち方をしない、と受け取られても仕方がないところもある。また、様々な不幸な事情によって、抱きしめらることなく育たざるを得ない子どももいて、その子どもたちは、あたかも愛情を知らない子どもである、と受け取られても仕方がないところもある。

そうした問題があるにもかかわらず、それでもなお、この詩が多くの人々のところに浸透して行ったという事実こそ、今日の社会全体の病根を見る思いがするのである。本報告書の内容は、心情的には「ノルト氏の詩と同じ方向を向いているものの、できる限り情緒的表現を排し、エビデンスがあるものを重視し、それを提示しながら論を進める方式を、本特別委員会の総意として採用した」ことを予め述べておきたい。

最後に一つお断りがある。この報告書は基本的に一般社会における「普通に生活できる子ども」に関する考察であることである。例えば、精神障害、発達障害、慢性疾病などによって通常の家や学校での生活ができない、あるいは、著しく制限されている、決して少なくない子どもたちについての考察はここにはほとんどない。このことは、決して彼らを見捨てているのではなく、それらの子どもたちについては、固有の考えを導入しなければならない、極めて大きな問題であるという認識を持つからである。言い換えれば、ハンディキャップをもつ子ども達が抱える諸問題については、正座して改めてそのことについてのみ集中して議論しなければならない問題なのである。

## I こころの発達の問題

こころはどこにあるのか？この自分は誰か？自分は自分をどこで認識しているのか？などと言う、「こころと自意識に関する根本問題」は、本報告の目的および対象の外にあるので、ここでは触れない。ある人は「こころは脳の中にある」と考えるし、別の人は「脳の実態はこころの中にある」と考えるかも知れない。分子生物物理学者のフランシス・クリックは「驚くべき仮説 (The Astonishing Hypothesis, 1994)」の中で、こころの活動基盤は脳にあると言い切ったし、また、哲学者のギルバート・ライルも「心概念 (The Concept of Mind, 1949)」の中で、巧みに明言を避けながらも「こころ」と「頭の中の出来事」との関係に強い関心を示している。それらに力を得て、ここでは反対意見がある事は承知の上で「こころは脳の中にある」という前提で話を進める。

### I-1 こころの座としての脳の発達

脳の最も基本的な構造と機能は、電気的活動をする神経細胞同士が線維の先端部のシナプスを介して他の神経細胞に情報を伝えることである。注目すべきは、一つの神経細胞から出た線維の終末で数万個のシナプスが形成され、逆に一つの神経細胞は数万個の神経終末を受けてシナプスを形成することであり、こうして網目状のいわゆる「神経回路網」を形成することである。神経細胞とその集合としての神経回路網がこなす情報処理は、イオンチャンネル分子 ( $\text{Na}^+$ ,  $\text{K}^+$ ,  $\text{Cl}^-$ ,  $\text{Ca}^{++}$  など)、神経伝達物質 (グルタミン酸、ドパミン、ノルアドレナリン、GABA など) および様々な受容体分子 (グルタミン酸受容体、モルヒネ様受容体など) が神経細胞の興奮、抑制に関係していることがわかっている。

#### (1) 脳の基本的な構造と機能は10歳前後にほぼ完成する

中枢神経は大脳半球、脳幹、小脳、脊髄からなるけれども、他の哺乳類と異なりヒトでは、出生直後にはこれらの構造が十分には出来上がっておらずに、生まれた後でも育ち続ける。脳の構造や機能がほぼ完成するのはおおよそ10歳前後であろうと思われる。これは例えば大脳皮質神経細胞の樹状突起の分枝の程度から見た神経細胞の成熟度が、10歳前後には成人のそれにほぼ達すること、あるいは脳波の基礎波である $\alpha$ 波が成人並みの9~12Hzに落ち着くのがその頃であることでも分かる[1]。

ところで、脳がこのように成熟するまでの発生・発達の過程で、様々な遺伝子の発現と抑制が関与していることが分かってきている。例えば、発生途中の脊髄においては様々な遺伝子が次から次へと一過性にしかし連続的に発現する現象が見られるが、その際 **sonic hedgehock [Shh]** 遺伝子の発現量に起因する蛋

白濃度勾配が生じており、それによって、分化する神経細胞の局在が決まっている。また、逆にある種の遺伝子が発現しないところで、運動神経細胞が分化する、など形作りのパターンが決まっている[2]。このように、一つの神経細胞が発生のある決まった時点に分化して、固有の場所に生着することが発生の初期から遺伝子によって、プログラムされておりわずかな場所のおよび実感的狂いも許されないのである。驚くべきことに、このような運命を決めるプログラムは、数千億個とされるヒト脳の神経細胞すべてに用意されている。さらに、個々の神経細胞がどこに向けて神経線維を伸ばして、どの神経細胞とシナプスを作るべきか、についてもすべてプログラムされていることを考えると、まさに気が遠くなるほどである。この複雑さと神秘性によって、脳は宇宙になぞらえて「小宇宙」と呼ばれる。

## (2) ヒトの脳の発達の過程で、神経細胞には「間引き」が起こる

先に述べたようにヒト脳の成長は、他臓器に比して早く、およそ 10 歳頃にほぼ完成する。しかし、こうして完成するまでの期間に、極めて不思議な現象が起っている。それは、脳の発生・分化の過程で、驚くべき量の神経細胞が一旦は作られ、そして、ある時期になると余分な神経細胞が間引きされる。その「間引き現象」は、1 歳までに著しく多く起こり、5~8 歳までにほぼ成人のレベルに達して終了する。これに伴い、シナプスの密度も 5 歳頃をピークにして、以後 20 歳頃までに成人のレベルに達する[3]。このような間引き現象が起っている時期が、興味深いことに、後述する「臨界期」にほぼ相当するのであり、脳がダイナミックに変化していると解釈できる。なお、この間引きは神経細胞にとどまらず、そこから出る神経線維の終末部がつくるシナプスも結果的に間引きされる。

## (3) 一旦完成した脳にも「可塑性」があり、これが学習の基礎となる

幼児期の子どもの脳が学習しつつ成長を遂げることは、それこそ脳のダイナミックな変化が起っていることにより理解できる。しかし、そのダイナミックな変化の実態は何であるのか？については長い間未知であった。一方、古くからシナプスでの情報伝達効率が変わることを可塑性(plasticity)と呼んでおり、例えば、19 世紀の Tantzi あるいは、20 世紀中ごろの Hebb などによって、そうした可塑性をもつシナプスの存在は予想されてきた。しかしながら、その存在証明は困難を極め、脊髄で研究していたノーベル賞学者のエックルス卿は、ついに投げ出したとさえ言われている。ちなみに脊髄は、可塑性が最も証明しにくい場所であることが現在では明らかになっている。

実際に可塑性シナプスの証明がなされたのは、1970 代になってからであった。しかも、その嚆矢とされる 1973 年に Bliss と Limbo が海馬のスライスで、刺激を繰り返すことによってレスポンスが増強する、今で言うシナプスの長期増強現象を見出した時には、記憶の最も原始的かつ基本的な姿である可能性など誰も予想していなかった。そ

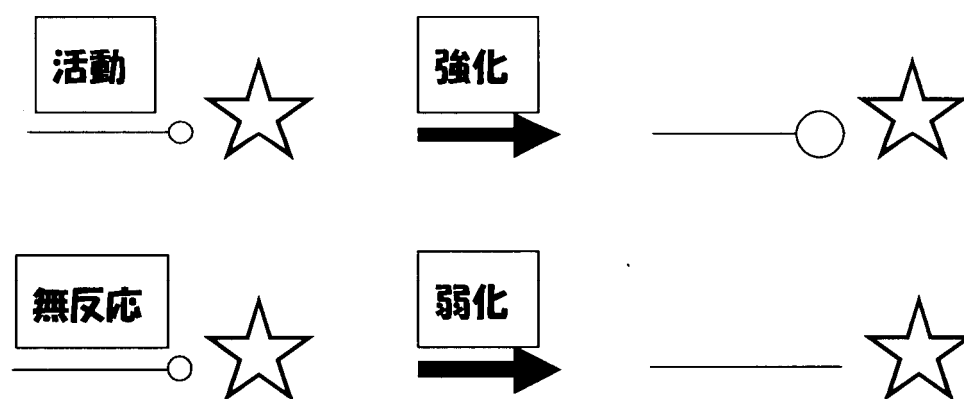


図 I-1 シナプスの活動の強弱によってシナプス機能は可塑的に変化する

れに対して、1977年に、塚原伸晃氏が小脳からの入力を絶たれた赤核ニューロンでは、大脳からの入力に姿形を変え、より小脳からの入力に近づくことをネコで証明した時には、その意味が明白であったためか、当初から多くの研究者を納得させた[4]。その後、神経系のあらゆる場所に可塑性シナプスが存在することが分かり、また、1980年には伊藤正男氏によって、長期増強のみならず小脳では長期抑制も生じ、これらの可塑性が「記憶・学習」の基本的要素であると考えられるに至っている(図I-1)。

(4) しかし、脳の可塑性に基づく機能獲得には「臨界期」がある

1967年に Lenneberg は、左半球が言語習得に必要な可塑性を保持している時期(12~13歳頃)を臨界期と呼んだ。その後、この臨界期という用語は、言語機能においてのみでなく、より一般化され、「ある脳機能が習得できるのは幼い頃の一定期間内だけである」という、その期間を臨界期と呼ぶようになった。もっとも有名な研究は、後にノーベル医学・生理学賞を受賞することになる Hubel と Wiesel の幼若サルの子眼遮断によって視覚機能障害が残る現象に臨界期があることの証明であった。サルの片眼を遮断しておく、遮断しなければ光に反応して電気信号を受けたはずの大脳皮質視覚野のニューロンが放っておかれるために疲弊して萎縮し、一定期間の後には、再び光による電気信号が到達しても、最早応じることができなくなる[5]。このような脳が可塑的に反応した結果としての神経回路の変化にも臨界期があり、ヒトでは、1~3歳に相当するという。ごく最近、理化学研究所の T.Hensch らによって、このような大脳皮質視覚野の「臨界期」は、GABA による抑制回路が形成されると終了することが示されており、臨界期そのものの本質的な実態が明らかになるとうとしている。

このような幼児期における脳の様々な機能についての臨界期には、数多くの研究が積み重ねられてきている。視覚以外にも、例えば言語野の形成における臨界期については、8歳以前からマルチリンガルであると、元もとの運動性言語野(ブローカ野)の領域内で、わずかながら異なった場所に各々の言語に対応する言語野が形成されるが、それ以後にマルチリンガルになった人では、両言語ともに流暢に操れるとし

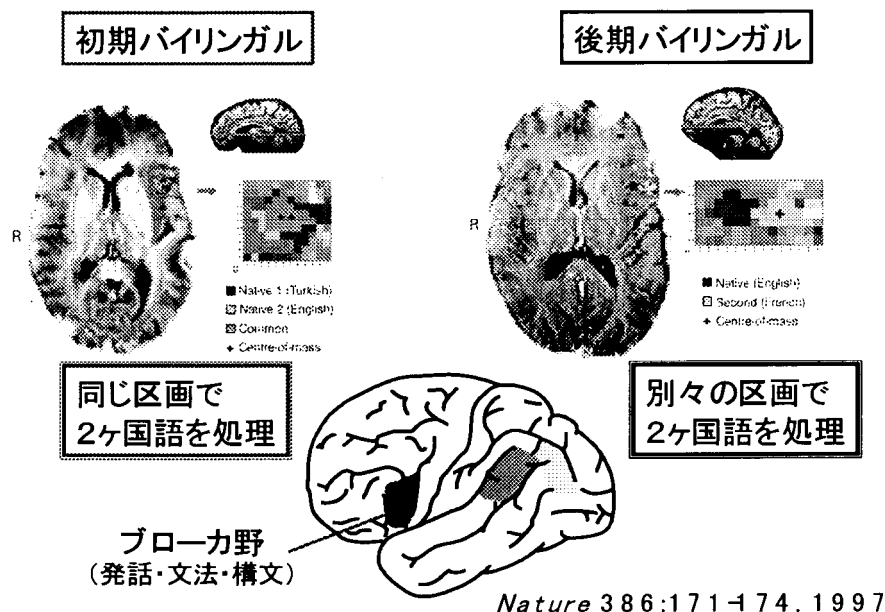


図 1-2 ヒトの脳皮質の言語野にも臨界期がある(澤口俊之氏原図)

でもそれぞれの言語に対応する領域は、同じブローカ野の中で互いに重なってしまっ  
て分離が明瞭でなくなるという(図 1-2)。

(5) 「環境」の豊かさが健全な脳の発達には必要である

脳の発達に、遺伝子だけでなく乳幼児期の環境によっても大きな影響を受けること  
は、経験的にも良く知られている。近年この経験則に対応する動物実験結果が色々  
出てきている。ただし、初めに理解しておく必要があるのは、ラットにおける「環境」とは、  
与えられる栄養などは同一であるが、1匹だけで飼育されているか(これは貧しい環境  
という)、あるいは、多くの個体とともに同じケージの中でスベリ台などのおもちゃととも  
に飼育されているか(これが豊かな環境とされる)、という区別がなされていることであり、  
これは直ちに人に当てはまるものとは言えない。しかし、こうした動物での研究から、豊  
かな環境は、驚くべきことに動物の脳重を増加させることが明らかにされている。また、  
豊かな環境は、大脳皮質神経細胞の突起の分枝形成を豊富にすることも別の研究か  
ら示されている。

一方、ヒトにおいても幼児期の子どもが環境が脳機能の発達に大きな影響を与え  
る事は、良く知られた事実である。例えば、1920 年にインドの東方で発見された「狼に  
育てられた子」の一人であるカマラが、9年後に死ぬまでに運動機能や感覚機能には  
十分な改善が見られたにもかかわらず、言語機能をはじめとする高度な脳機能には、  
思うような改善が見られなかったとされている。こうした幼少時に人間との接触、あるい  
はコミュニケーションが十分でなかった子どもが、救出、あるいは、発見されてから見せ

る機能改善には、人間との接触が何歳から絶たれたか、絶たれ方が完全であったか、などが大きく影響を受けることが分かっている。例えば、ドイツで発見されたカスパー・ハウザーは救出後の脳機能改善は目覚しく、自伝を書いているほどであるが、それは、幼児時に人間との接触があったためではないかと考えられている。つまり、極めて貧しい社会的環境で生きてきた子どもの脳機能の改善にも、何歳頃と明確に言うことはできないものの、やはり「臨界期」があると考えざるを得ないのである。

子どもをとりまく環境は、時代とともに変化する。昔はラジオだけであった情報源が今やテレビ、ビデオ、インターネットなど多くの種類となり、一見豊かな環境であるように見える。だが、果たして本当に豊かなのか？一緒に住んでいたおじいちゃんやおばあちゃんとの会話もなくなり、近所のガキ大将の兄ちゃんの自慢話も少なくなった現在は、その代替りの役割をテレビなどが果たしているのだろうか？日本小児科学会の「こどもの生活環境改善委員会」は、最近こうした点を学問的に検討した結果に基づいて「乳幼児のテレビ・ビデオ長時間視聴は危険です」と、提言した[6]。

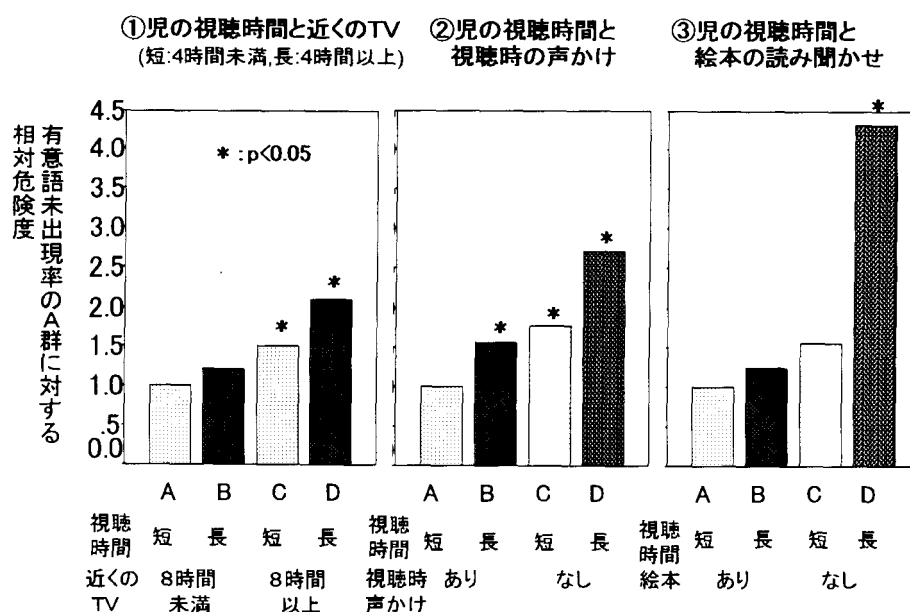


図 1-3 テレビ視聴時間と乳幼児の言語発達の関係 [6]

この調査は、2年前に都市部、中核市、農村地区の3箇所で、1900名の親に対して、乳幼児の発達へのテレビの影響に関する質問紙調査として行なわれたものである。その結果、図I-3に示すように子どもが4時間以上テレビを見ている家庭では、有意語出現の遅れが認められるなどの影響があったという。勿論こうした研究には、様々な解釈があるし、テレビそのものが悪であるはずもなく、今後もその他の脳機能発達に関する研究を積み重ねるべきである。しかし、人とのコミュニケーションそのものが、こころの座としての脳の発達期（「臨界期」といっても良い）にある乳幼児の環境そのもの

を豊かにするであろうし、それを補助することが可能なテレビ等をどのように利用すべきかは、重要な問題であり、今後の大きな課題であろう。

#### ☆引用文献

1. 大熊輝雄:臨床脳波学、第3版、74—93頁、1983
2. Jessell TM: Neuronal specification in the spinal cord: Inductive signals and transcriptional codes. Nature Review Genetics, 1:20-29,2000
3. Hoffman RE and McGlashan TH: Synaptic elimination, development, and the mechanism of hallucinated “voices” in Schizophrenia. Amer J Psychiat, 154:1683-1689,1997
4. 塚原仲晃:シナプス結合の可塑性、『神経系の発生・分化と可塑性』(南雲、萬年共編)、107—128, 1976
5. Hubel DH and Wiesel TN: Functional architecture of macaque monkey visual cortex. Proc Royal Soc London, Ser B, Biol Sci, 198:1-59,1977
6. 谷村雅子ほか:乳幼児のテレビ・ビデオ長時間視聴は危険です。日本小児科学会雑誌、108:709—712, 2004

#### ★参考文献

- ・ 門脇厚司:子どもの社会力、岩波新書648、1999
- ・ 小泉英明(編):脳図鑑21、工作舎、2001
- ・ 藤永保ら:人間発達と初期環境、有斐閣、1987
- ・ ジャック・メレルとエマニュエル・デュプー:赤ちゃんは知っている—認知科学のフロンティア—、藤原書店、1997
- ・ 高橋道子他:子どもの発達心理学、新曜社、1993
- ・ OECD教育研究革新センター(編):脳を育む—学習と教育の科学—、明石書店、2005
- ・ 市川宏伸他(編):子どものこころのケア—SOSを見逃さないために—、永井書店、2004

### I-2 子どものこころの発達

こころの時代と言われて久しいが、今何故子どものこころなのか。恐らく最近の子どもをめぐる様々の事件、いわゆるキレる子どもの出現や、低年齢化する少年の凶悪犯罪、逆に子どもたちが犠牲になる児童虐待など、こころの問題が社会の視聴を集めるようになってきたからであろう。しかし、一体こころとは何か、こころはどこに宿るのか？人のこころは、目で見ることには出来ない。自分のこころも鏡に映して見ることは出来ない。現代人は、こころは脳のどこかに宿ると考える。ヒポク



ラテスも思考や判断は脳の働きと考えた。最近ではPETの時代になって脳の局所的な変化を画像で捉えられるようになったが、まだまだこころの動きを画像で捉えることなどは夢物語である。

小児科医は、子どもを診察するが、こころの診察は出来ない。表情や言動、言葉や行動から察することしか出来ない。ジグムンド・フロイド (Freud,S) は、人間の心を氷山に譬え、目に見えるのは一部であり、水面下にある見えない部分が、こころであるという。小児科学は、子どもの発達や病気を診る学問であるが、身体発育については教科書によく書かれているものの、こころの発達は、ほとんど書かれていないに等しい。

### (1) 成長、発達と発育期の区分

ヒトは、卵子と精子の受精から出発し、成長発達をとげて成人になり、次世代を作り、やがて老いて死に到る。英語で成長は growth、発達は development であるが、前者は、三次元的拡大・増加で身体的な発育を指すのに対し、後者はことばの発達など機能的充実あるいは成熟を意味し、ニュアンスの違いがある。従って、こころの問題はどちらかといえば成長よりは発達に属すると考えてよい。その成長発達の過程は、表I-1のように区分されている。

表 I-1 子どもの成長発達の過程

名 称	期 間	コメント
胎生期	— 受胎より出生まで —	母体内の 40 週
周産期	— 分娩開始より誕生までのやや短い期間 —	最も出来事が多い
新生児期	— 周産期に続く生後 4 週まで —	出産の影響から脱却し、自立生存する
乳児期	— 生後 1 年まで —	身体が急速に成長し神経系も発達する
幼児期	— 小学校入学まで —	赤ちゃんのふっくらした体が外形上スリムな体型になる
学童期	— 6 歳から 12 歳頃まで —	1年に平均体重は3キロ、身長は5センチ増える
思春期	— 二次性徴の開始から生殖能力をもつまで —	個人差が大きい

### (2) こころの発達

発達心理学の知識は、乳児検診など子どもの医療の世界でも必要であるが、どちらかといえば小児科医は、苦手としている。また、臨床心理士も子どもを対象とする専門家は少ない。身体の発育にも個人差は大きいですが、こころの発達は、さらに幅が大き

いのが特徴である。米国の小児科の教科書には、こころの発達に関しては、精神分析的傾向が残っており、こころの発達のステージ理論として、今でも表1-2のようなフロイドとともにエリクソンの心理社会的な考えが紹介されている。これは前述の発育期の分類にもよくマッチしている。また、ピアジェの認識論によるステージ論も用いられる。

表 1-2 子どものこころの発達ステージ

	フロイド	エリクソン
乳児期(0～1歳)	口唇期	基本的信頼
幼児期(2～3歳)	肛門期	自律性/恥・疑い
前学童(3～6歳)	エディプス期	/罪悪感
学童期(6～12歳)	潜伏期	勤勉/劣等感
思・青春(12～20歳)	青春(思)期	自己同一性

### (3) 発育期の心的問題(小児医療の変容)

子どもの病気は、過去 50 年の間に大きく変わってきた。疾病構造の変化といわれるもので、減少した疾患は、肺炎、下痢、急性感染症、結核など、栄養失調も殆んどなくなった。横ばい状態の疾患は、先天異常、遺伝性疾患、白血病など悪性新生物、その他慢性疾患などで、明らかに増加傾向にある疾患は、気管支喘息などアレルギー性疾患、川崎病、そして、激増といえるのが心身症である。

心身症で子どもと大人の大きな違いは、子どもはこころの病によって、成長発達に影響が出ることである。極端な例は、被虐待児で、体重増加も悪く顕著に痩せたり、身長伸びも障害され、愛情遮断症候群 deprivation syndrome とよばれる。このような発育の障害は、ケアが充分でなく放置されることにより、摂取カロリーや栄養素の欠乏にもよるが、同時に心的ストレスによって、成長ホルモンの分泌低下や他の内分泌異常をきたすことにもよる。この状態は、適切な養護の環境におけば、改善も著しい。

心身症の激増に対して、わが国における小児精神保健医療の体制は、ソフト面でもハード面でも極めてお寒い状況にある。しかし、幸いなことに子どものこころの問題に関しては、日本は、アメリカよりも 20～30 年遅れている。アメリカでは「家族不全 familial insufficiency」という言葉がすでに 30 年前に一般的に使われていた。当時来日した米国の小児科医が、“子どもたちが、家庭でも社会でも大切にされているから日本の子どもは幸せだ”と、言っていた。Nelson などアメリカの小児科の教科書では、「Social Issue」に極端に多くのページが割かれていて、その内容は、養子・里子・親以外に育てられる子ども、離婚・親の失踪・死別、DV・虐待・ネグレクトによる栄養失調、Munchausen 症候群 by proxy

等の記述で、ほとんどが親子関係や家庭環境の問題が基底にあるものであった。日本のテキストにもそういった項はあるものの、まだ分量としてははるかに少ない。しかし、最近の日本社会は、虐待の増加など急速にアメリカ化しており、近い将来事態が深刻になる恐れがある。

#### (4) 育児と躰

躰は育児の一部である。一般に躰は幼児期に始めるものである。躰は厳しすぎてもいけないし、好き勝手に放っておいてもいけない。躰は難しい。福沢諭吉は、「育児は言葉によるべからず、目によらしむべし」と言った。「子どもの躰に言葉はいらない」とは、100歳の小児科医内藤寿七郎博士の言葉である。「ダメ!」とか「いけません!」とか厳しい禁止の口調は禁物とされる。2歳児でも、叱るよりも出来るだけ褒めてやるのが大事である。戦時中の山本五十六元帥の言葉に「見せてやり、言って聞かせて、させてみて、褒めてやらねば人は動かさず」がある。ここでの人は、もちろん大人であるが、子どもの躰も褒めることが大切である。

子どもへの体罰の是非が論ぜられる。体罰の影響を実験で証明は出来ない。2歳児までは体罰は原則として避けたい。体罰によって子どもの恐怖感、反抗心、不信感などが強化される。最近では、乳幼児の虐待と躰の区別がむずかしい場合もある。子どもを叱る、または、やむを得ず体罰を与える場合も、親の子に対する愛情が必要である。

#### (5) 3歳児神話は神話か?

「三つ子の魂百まで」は、かつては幼時期に作られた性格は一生変わらない、という意味に解された。現在ではむしろ3歳頃までの育児環境の大切さを説いている、と考えが変わってきている。そこで、ひと頃日本では、「子どもは3歳までは常に家庭において母親の手で育てないと、その後の成長に悪影響を及ぼす」という、3歳児神話が一般化して、その結果、母子関係が密接過ぎて逆に社会性等の発達の遅れにつながる場合もあり得ると指摘された。これについては、1998年の厚生白書が「合理的な根拠は認められない」として否定している。ただし、3歳までの間が脳・神経系や情緒、生活習慣の発達上重要な時期であるのは科学的事実であり、この時期に「誰がどう世話をするか」は重要な問題である。1999年に雌マウスにのみ育児行動の有無に関わるPeg3遺伝子が発見され、育児の科学の分野に分子生物学が入った。

#### (6) 思春期の諸問題

10代の行動は、社会を写す鏡である。10代の問題は、今、子ども達が置かれている現状を訴えているとも見ることができる。10代前半の死因において、1970年に10位に登場した自殺が、2000年には3位に上昇、10代後半では、自